

が、今勤して田となつてゐる。按ずるに芝原七郎といふものは芝原將監と同人ではあるまいかと記する。館中の館といふものもこれと同述であらう。

**シハラシヨウケン 芝原將監** 羽咋郡柴垣の郷士であつた。館中將監ともいふ。能登名跡志に『芝原將監は瀧谷妙成寺開基檀那にて、法名法光日惠大居士と號して、瀧谷開山堂に位牌等有。則ち妙成寺開山日乘上人の伯父にてあり。日乘も此家にて出生の由。』と記する。

**シハラゼン 柴原善** 通稱七郎。若水と號した。藩の計吏にして算理に精しく、性讀書を好んで充棟の典籍を蓄へ、夙に敏學を以て稱せられた。前田治脩の時聘せられた新井祐登は周易の古義を首唱し、一家の説を立てたから、治脩は善をして就いて學ばしめんとしたが、善は祐登を以て賣卜の徒として業を受けるを欲しなかつた。併しながら君命拒み難きを以て、暫く病と稱して出でず、刻意易を讀むこと三旬餘にして、大に發明する所があり、乃ち祐登に詣りて弟子の禮を執り、質問論難した。然るに祐登は大家を以て自ら處り、強辯して善を服せしめんとしたので、善は益悦ばず、書を近侍の臣に上つて、祐登の心術陋劣、取へて師とするに足らざるを以て、特立商推して以て成就する所あらんことを請うたが、侍臣は之を斥けて受けなかつた。善乃ち憤悶して退き、一夜宵かに家を棄てて遁れ去つた。近隣その異狀あるを怪しみ、門を破つて入れば、家財什器一も見所なく、唯一歳の俸を堆積し、室内灑掃、壁間一瓶の插花と七絶の詩とあるのみであつた。

**シバハン 斯波蕃** ↓ツダマサクニ 津田正邦。  
**シバミツタネ 斯波滿種** 左衛門佐。義種の子。應永十五年父の卒後加賀の守護に任せられたが、廿一年富樫滿春と滿成二人が守護となり、翌日滿種は高野に遁世し、三十四年七月四日逝去した。  
**シバヤ 柴屋** 金澤南町上の端に柴屋といふ町人があり、初めて煙草を賣り弘めた。因つて躍り歌の留めにも『柴屋たばこやらんしよや』というた。

**シバヤマ 柴山** 江沼郡湯河に屬する部落。菅生石部神社藏應永廿年十一月二日の寄進狀に、『田參段卅代、此内二段片山津老阿前在之、一段卅代柴山湯屋谷在之。』とある。湯屋谷の名によつて案ずるに、柴山の地片山津温泉の對岸にあるから、或は温泉湧出の所があつたのでなからうか。

**シバヤマカタ 柴山渴** 江沼・能美二郡の境に在つて、芝山渴とも書き、文人は芝湖ともいふ。砂丘を以て海と隔つた渴湖で、串川によつて今江渴と相通じてゐる。この渴は往時尙南方に延長してゐたが、動橋川の汎濫原によつて縮少した痕跡が明瞭である。現在長さ四六九一米、幅九八二米、周回一四軒三、面積五一四ヘクタール。注入河川中の最も主なものは動橋川で、渴の東南隅から入り、之と相並んで北方に馬渡川、南方に八日市川がある。

**シバヤマゴンベエ 柴山權兵衛** 加賀藩に仕へ、知行五百石。慶長十九年三月七日高山南坊・内藤徳庵等と共に切支丹の徒たるを以て京師へ送られ、板倉伊賀守に遇し、九月

廿四日阿媽港に放逐された。  
**シバヤマシヨウ 柴山庄** ↓トミツカシヨウ 富墓庄。  
**シバヤマジヨウ 柴山城** 江沼郡柴山に在つた。江沼志稿に、この村に柴山八郎左衛門の堡があつて、土居の形を存するとし、越登賀三州志故墟考にも、遺跡は柴山渴の北に在り、その西に城主の墓があると記する。  
**シバヤマトシヤス 芝山俊康** 小川坊城大納言俊完の二男。寛永十五年前田利常に仕へて千石を領し、萬治元年歿した。子孫世々藩に仕へる。  
**シバヤマナホマサ 芝山尚政** 通稱彦三郎。承應三年二百五十石を以て前田綱紀に召出され、元祿十五年大小將から聞番見習を命ぜられた。享保十年六月十日歿、享年八十六。子孫世々藩に仕へる。

**シバヤマミヨウジン 柴山明神** 鹿島郡能登島なる閩の産土神で、祭神は月讀尊であるといふ。今柴山神社と稱する。同島内南・無關・半浦にも皆柴山神社があるが、各祭神を異にする。  
**シバヨシタネ 斯波義種** 修理大夫。義將の弟。元中四年(嘉慶元)富樫昌家の歿後加賀の守護となつた。應永十五年二月二日卒。  
**シバヨシミツ 芝吉光** 前田氏所藏の短刀で、五寸九分ある。元來江戸の芝で鳥目五十文であつたものを、此處彼處に賣廻り、無縁坂の商人が二百文に買ひ、それを本阿彌光雲が五百文で手に入れて磨立てた所、大口吉光に極つた。大口とは吉光が老年に及んで用整自由ならず、吉の字の口を大きく切つたものといふ。後前田利常之を得て、黄金二百兩を光

雲に與へ、光雲は代金五百枚の極を添へた。  
**シバリクビ 縛首** 藩政時代に、死刑囚を捕縄で縛したまゝ斬首するをいうた。歩士並以上の者で、人を殺し金銀を奪うた者、屢私曲を累ねた者、番所の定書を破毀し城門の鍵を隠匿したもの等の縛首になつた實例がある。縛首は繩懸にて刎首といふこともある。  
**シバキ 芝居** ↓カブキ 歌舞伎。  
**シヒ 椎** ↓シイ 四位(鳳至)。  
**シヒコ 鮎子** 親元日記文明十三年十一月十九日畠山左衛門佐から献上のうちに鮎子二十と見える。能登産のマグロの幼魚、即ちシビコ又はタバコレ(煙草人)といはれるものである。

**シヒドマリ 椎泊** ↓シンドマリ 鹿泊。  
**シヒナダケ 椎奈嶽** 惣國風土記に石川郡の四至を擧げて、北は椎奈嶽とある。隨うて椎奈嶽に就いて説明を試みるものもあるが、惣國風土記が偽書である上は、論ずるまでもない。  
**シヒノキ 椎木** 鳳至郡阿岸郷に屬する部落。

**シヒノキノハナ 椎ノ木ノ端** 鳳至郡諸橋郷七海(今七見)に在る海角。寶永元年一覽記に、『七海村のはづれの出はりに、椎の大樹多くあり。茂の内に多びすの小社あり、椎の木の端といふ。』とある。  
**シヒハツブラヒメジンジャ 椎葉圓比咩神社** 延喜式神名帳にはシヒハノツブラヒメと訓むもので、羽咋郡柴垣に在る。式内等舊社記に『椎葉圓比咩神社。式内一座。甘田保柴垣村鎮座。今稱柴垣之宮。社地廣大也。』と見える。本社の後方に前方後圓墳があり、葦